

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(12):

「失敗が約束された地」への希望なき出発……海外出張は攻撃的に準備する

<http://eetimes.jp/ee/articles/1301/15/news006.html>

海外出張とは、「魅惑の世界」への出発ではありません。「失敗が約束された地」への希望なき出発です。それゆえ、およそ考え得るあらゆるトラブルパターンを想定し、入念な準備をしておくことが、われわれ英語に愛されないエンジニアが無事に帰還するための唯一無二の方法なのです。今回は、実践編(海外出張準備)の前編として、江端流の攻撃的かつ戦略的な出張準備を紹介します。

2013年01月15日 07時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

20歳の時から、私は海外の一人旅を始めました。実家の都合もあって、アルバイトで学費と生活費の一部を自分で稼ぐ、いわゆる「苦学生」だったのですが、あまりそういう悲愴(ひそう)感は持っていませんでした。

大学では良い友人に恵まれました。彼らは、割の良いバイトを紹介してくれたり、ご飯を食べさせてくれたり、一般教養の講義の代筆レポートを買い上げたりしてくれました(今になって思えば、もっと、ふっかけとけば良かった)。

私が所属していた工学部は実験とレポート執筆の毎日で、誰も彼もがバタバタと忙しく、あまり遊ぶ時間がありませんでした。そして、幸いなことに、私は大学の勉強(特に実験など)が、結構好きだったのです。

とにかく、週7日(つまり毎日)アルバイトを続けており、大学とバイト先と下宿の3点移動の日々を過ごしていると、大体、年度末である3月に、「小金が余っている」ことに気がつくというパターンが多かったです。といっても、学生のコンパを1年間全部キャンセルすれば捻出できる程度の金額でしたが。

「来年のために貯金する」という観念がなかった私は、これを毎年、一人旅に使ってしまうことにしていました。「来年の金のことは、来年考えればいい」と思うことができたあの時代、私は若かったのだと思います。

海外の一人旅=自己修行!?

私が選んだ国は、当時としては貧しかったアジア各国、例えば中国、タイ、ネパール、インドなどでした。なぜ、そのような国を選んだかと言うと「見え」です。



写真はイメージです

私の思考回路では、米国や欧州などの先進国を旅することは、第三世界搾取国への加担、アジア同胞への背任行為であり(何のことやら分からん)、ましてやパックスツアーを使うなどは、自分の器の狭さを自ら証明するような「みっともない」行為に映ったのです(正直に言うと、アジア各国は滞在費用が安い、という理由も入っていましたが)。

いずれにしても、私は自分の海外一人旅を「自己修練」「修行」と考えていました。

江端智一は大バカ者でした。

- その当日、宿が決まっていない中、視界の限り広がる地平線に沈んでいく太陽を眺めているときの、果てしない心細さ
- 言葉の通じない国で切符を購入しなければならない不便さ、不安さ
- 窃盗を心配しながら、ドミトリー(1つの部屋にたくさんのベッドが入っている、病院の大部屋のような宿舎)で、パッキングした荷物に抱きつきながら寝る空しさ
- 電話のない辺境地において、フライト72時間前の、飛行機のリコンファーム*1)をするために、電話局を探し回った必死さ*2)

(*1)今では信じられないかもしれませんが、当時、航空会社は、72時間前に「帰国の飛行機に乗りますよ」と一報入れておかないと、自動的に予約がキャンセルされるという、ゴーマンな制度を設けていました。

(*2)いわゆる「OKチケット」という格安チケットであり、便の変更が不可能で、もし欠航した場合、いつのフライトに振り替えられるか分からなかった(1週間後のフライトということもあり得て、しかも宿泊代などの補償は無し)のです。

己の器量を測ることもなく、小さい器の自分に自分が与えた、これらの、「心細さ」「不安さ」「空しさ」「必死さ」が導いた結実は一切何だったか。

それは、「せっかくの海外旅行を、苦痛に満ちあふれたものにする」という、誠に愚かしい行為でした。旅を楽しむために、一番大切なことは何だったかといえば、トラブルを可能な限り少なくすることだったのです。

当時、私たち一人旅者(リュックを背負って旅をしていたので「バックパッカー」と呼ばれていました)は、「JALパック」などのパックツアー旅行をする同世代の若者を嘲笑していました。「JALパック」や「JTBパック」を使い、グループ(男4人くらいの仲間)でアジアを旅してきた後輩が「自分の器が大きくなった」と触れ回っていた話では、よく彼を笑い者にしていたのですが、とんでもない間違いでした。

嘲笑されるべきは、私の方だったのです。

パックツアーであれ何であれ、誰かがトラブルシューティングを引き受けてくれることで、自分は観光名所を堪能し、食事を楽しみ、人との会話に花を咲かすことができたなら、それが「本来の旅行の目的」であるはずで、自分の器を大きくしようとして、あるいは、大きく見せようとして、自分の器を超えるむちゃな旅をして、自分を苦しめてきただけの私は、「バカ」を100乗しても足りないくらいの大バカ野郎でした。

学生時代の一人旅を通して、私は、「海外で快適に過ごしたいなら、見えもプライドもかなぐり捨て、トラブルを徹底的に回避できる手段を取り、備えをしておくべきである」ということを学んだのです。

海外出張における3つの信念

こんにちは。江端智一です。

今回は、海外出張の準備についてお話したいと思います。

私は「海外出張の準備＝トラブル回避の実行手段」と位置付けます。すなわち、周到な準備こそが、海外出張におけるトラブルを回避する、というわけです。

さて、海外出張における私の信念(信仰といってもいいかも)は、次の3つです。

- (1) 誰も信じてはならず、何も信じてはならない
- (2) どこにしようと、何をしようと、必ずトラブルに遭遇する
- (3) 遭遇したトラブルを完璧にリカバー(回復)する手段はない

この信念から導かれる、海外出張準備のポリシーは以下の通りです。

- トラブルによる被害を最小限にとどめるため、考え得る最大限の準備をしておく
- それでもなお、完璧なトラブル回避は不可能である
- トラブルに遭った場合の初動方針は、「逃げて、逃げて、逃げまくる」である
- トラブルシューティングは、自分の身柄の安全を確保してから開始する

今回、私が申し上げる「準備」とは、いわゆる「海外旅行前チェックリスト」などという甘っちょろいものではありません。

言うなれば、「英語に愛されないエンジニア」に特化した、「攻撃的かつ戦略的な海外出張

準備」の提案です。

海外出張のトラブル、あるある大事典

では、以下、海外出張におけるトラブルを、私が体験した具体的な事例で説明します。

資料は先方に届きません

<トラブル事例>

資料作成方法については、連載を2回分も使って説明しましたので、ここでは繰り返しません。海外出張に先立って、電子メールで先方に資料を送付するケースが多いと思います。しかし、意外に知られていませんが、電子メールプロトコル(SMTP)は、電子メールの到達を「保証していません」(RFC5321)し、途中で電子メールがロストしても、それを知らせる手段も規定されていません。



写真はイメージです

<準備しておくこと>

海外の相手先とそれ以外の関係者にも、資料を確実に転送しておくことです。海外の取引会社に資料をメールで送付する場合、暗号化して送付するのはもちろんですが、相手先から「受領した」と記載されたメールを送り返してもらうことが肝要です。「受け取っていない」と言わせないために、その返信メールを印刷したものを持っていくことも忘れないでください。

必ず忘れ物をします

<トラブル事例>

フライト前日のパッキングは、トラブルを発生させるだけの行為です。準備する資料、持っていく物品が、1つも忘れることなくフライト数時間前に準備できたとしたら、それは「奇跡」です。前々日であれば、足りない荷物、見落としていた手続き、準備していなかった書類などを準備することがありますが、前日では、もう対応しようがありません。



そして、海外においては、その「たった1つの忘れもの」が致命的なトラブルになります。

<準備しておくこと>

持ち物リストを作成して、とにかく前々日までに、荷物をキャリーバックなどに突っ込んでおくことが必要です。携帯電話やPCも、コンセントから引き抜いた電源ケーブルごとキャリーバックの中にたたき込み、必ず前々日には、そのキャリーバッグを手荷物の中に突っ込んでおいてください。一度パッキングを始めれば、忘れ物に気がつくことは結構多いものです。

そして、言うまでもなく、荷物の量は最小限にすることです。機内持ち込みだけにできれば言うことなしです。下着、靴下、ワイシャツなどは、2日分あれば十分です。そんなものは、バスタブに突っ込んで、せっけんで洗って干しておけばよいのです。

2日あれば、ホテルの中でも乾きます。プライベート用の服を持っていく必要はありません。私は、スーツで歓楽街を歩いていて、叱られたことは一度もありません(目立ちますが)。

成田空港に無事到着できません

<トラブル事例>

世界一緻密な運行制御を誇る日本の鉄道のダイヤは、乱発する人身事故でズタボロです。西村京太郎ミステリーは、もはや我が国では成立しなくなりました。犯人の苦心のアリバイ作りが徒労に終わることは結構なことですが、われわれの業務までつぶされてはかかないません。

<準備しておくこと>

成田空港までの全区間で、発生し得る事故を想定し、代替ルートをイメージしておくことが必要です。鉄道会社は、事故の情報を明確に言ってくれません(電車の遅延は、10分の予定が2時間になることも、またその逆のパターンもあり、どちらに転んでも客からはクレームを受けるからです)。

このような場合はTwitterの検索機能が結構使えます。事故の情報がリアルタイムで更新される場合が多いので、代替ルートを使うべきか否かを判断しやすくなるのです。タクシーに飛び乗るのであれば、これも初動の判断で決まります。事故発生からの報告から1分後には、タクシー乗り場に走っていることが望ましいです。長蛇の列になっていたら終わりです。

セキュリティを通してもらえません

<トラブル事例>

座席番号が印刷された飛行機の子ケットを受け取った。荷物も預けた。ボーディング(搭乗)まで時間がある。じゃあ、レストランで飯でも食うかと思っている人。何考えているのですか。そんな時間があったら、1秒でも早くセキュリティを通過しなければなりません。



荷物を預けないことをポリシーとしている私の場合、PC2台が入った手荷物4つを通過させるだけでもひと苦労です。そして、たいてい、中を開けてみせろと言われ、ほぼ100%ボディチェックを受けます。

成田空港のセキュリティゲートのアラームは、機械が金属を検知して作動しているのではなく、装置の側にいる誰かが、私の人相を見てボタンを押しています(間違いなし)。成田だけではありません。米国のサンフランシスコもコロ라도、フランスのシャルルドゴールも、つい最近では中国の広州までもが、インターナショナル連携で、私の出張を妨害しました。

私は、国際的テロリストとして指名手配されているのではないかとまで疑心暗鬼に陥っています。人相が悪いというだけで、ボディチェックを強要されていることは、私の中ではもはや確信に近いです。

<準備しておくこと>

持ち込む荷物の数を減らし、セキュリティチェックに目(ガン)を付けられないように、爽やかで、軽やかな笑顔でゲートを抜けましょう。全身から暗黒面のフォース(またはオーラ)がにじみ出ないように、感情を抑えましょう。たとえ、あなたが、理不尽な出張命令に怒り狂っていたとしてもです。

服装にも気をつけましょう。できるだけ色調の明るい、典型的なジャパニーズビジネスマンを装えるような服を着用するようにしましょう。

また、政治的信念を持っていない、フツウの日本人を演じきることに全力を注ぎましょう。

間違っても、

- 膝まである漆黒の防寒着に、黒のキャップを着用し
- iPodのヘッドフォンを装着し、黒のリュックサックを背負い
- 黒のサイドバッグを肩からかけて
- 銀色のハーフサイズのスーツケースを携行する

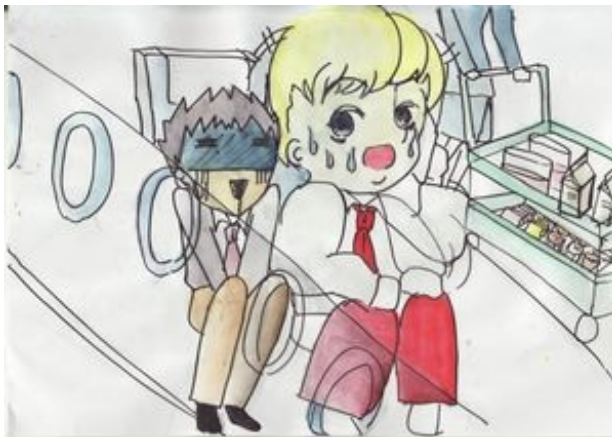
という、「特殊工作部隊の狙撃手」のように見えてしまう服装はNGです。

この格好で英国はロンドンのヒースロー空港の「外」に出ようとしたところ、私は警察官につかまり、ボディチェックと全部の荷物の開示命令(つまり、職務質問)を受けることになりました。

隣の席には、「快適な空の旅」を一瞬でぶち壊すヤツが座ります

<トラブル事例>

こういうヤツです。



- 「あんた、香水の風呂に入ってきたのか？」というような、気を失いかねないほどの強烈な香水を散乱させる米国人のおばさん
- 「あんたはどこの国の人間だ」「学生か、社会人か」「結婚しているのか」と聞きまくり、こっちが眠そうなふりをしたり、仕事の資料を読んでいるふりをしたりしても、質問が止まらない米国人のビジネスマン。「子供はいるのか」と言われて、うかつに“Yes”と答えようものなら、自分の子供(正直、「かわいい」とは思えない肥満の子供)の写真を取り出して見せつけた挙げ句に、私に「お前の子供の写真を見せろ」と言い、「そんなものは持ち歩かない」と言う、いきなり軽蔑したような目で私を見る「家族至上原理主義者」
- そして、極め付けが、「あんたの腹の一部、肘かけを越えて、私の座席の1/4を占拠しているのだけど」、というような、常軌を逸した米国の「肉」

さらに、この時のフライトが、北米の東海岸行き(当然エコノミー席)という最悪のケースで、14時間30分もの間、「肉プレス機」の中に閉じ込められるという、この世の地獄を味わいました。

国土交通省は、かかる「肉」に対して2席分で予約を受けるような政令を制定すべきでしょうし、かかる政令がなくても、航空会社は自発的に「肉は2席分」の運用を開始すべきです。今度、あの「肉プレス機」の隣になったら、私は「肉」本人ではなく、行政庁と航空会社に対して、訴訟を起こす準備があります。

<準備しておくこと>

まず、「香水」と「家族至上原理主義者」に対しては、アイマスクと耳栓とマスクで対応しましょう。「あんたが迷惑だ」、または、「私はアンタにコミットする気は全然ないのだ」という明示的な意思表示になるでしょう。

一方、「肉プレス機」対策ですが、正直に申し上げて、決め手となる手段はありません。いや、あるにはあるのですが、絶対的な意味においてお勧めはしたくありません。本当に危険なのですよ、「睡眠薬とアルコール」は。

アルコールや睡眠薬は、到着直前に効いてきます

<トラブル事例>

飛行機のハッチが閉まった瞬間、あなたは現地の時刻に時計を合わせて、直ちに現地時間の行動に合わせる必要があります。ジェットラグ(時差ボケ)防止のためです。ところが人間の体内時計は、そんなに簡単に時刻を変更できるものではありません。飛行機に乗ったら、現地時間は午前3時などというケースは結構あります。

このような場合、可及的速やかに寝ましょう。機内食なんぞは食わなくてもよいです。この初動睡眠に成功するか否かは、現地での活動に大きな影響を与えます。エコノミー席は睡眠に適した場所とは到底呼べませんし、ましてや、前述したような「肉」プレス機に挟まれながら眠りにつくことは、至難の技です。

話は逸れますが、「皆さま、快適な空の旅をお楽しみください」とアナウンスする旅客機の機長は、自分が「客」となって飛行機に乗ったことがないのではないかと、私は疑っています。私は、空の旅が快適であったことなど、一度たりともありません。数回のトイレタイムを除いて、飯や飲料水の給餌を受けながら、あんな狭い席に押し込まれ、同じ態勢を維持させられて十数時間。これをどういう文脈で「快適」という単語で表現できるのか、私には全く理解できないのです。

<準備しておくこと>

睡眠薬、またはアルコールを準備しておくといよいでしょう。必要なら、着席と同時に摂取してしまうのもよいと思います。睡眠薬は、お医者さんに相談すると処方してくれます。また、外国では、信じられないほど強力な睡眠薬(睡眠導入剤?)がスーパーマーケットで売っています。私は、10瓶単位で購入してきます(ただ、手荷物検査で見つかる厄介です)。



写真はイメージです

ただし、やってはならないのが、「睡眠薬とアルコールの同時摂取」です。タブー中のタブーで、冗談抜きで命に関わります。事実、私は死線をさまよったことがあります(次回、このエピソードを紹介します)。

この他、「前日無理して徹夜する」などもあります。実際に出張前の準備というのは、ハンパでなく忙しいですから、それも悪くないかもしれません。ただし、空港に向かう途中、電車で寝過ごすというリスクもあります。

荷物はターンテーブルから出てきません

<トラブル事例>

幸いなことに私は経験がないのですが、私の友人には、背広を入れたスーツケースをロストバゲージ(紛失)して、Tシャツとジーンズで海外の会社の社長に面会するという事態になった者がいます。

また、翌日使う打ち合わせ資料やプレゼンテーション用のPCが、ロストしたスーツケースに入っていたとしたら、もはや出張自体が完全に失敗です。そのようなことを報告して「そうか、仕方ないな」としてくれる会社は、私が知る限りありません。あなたは、次の人事異動が発表されるまで、ずいぶん不安な日々を過ごすことになるでしょう。

<準備しておくこと>

「飛行機に預けた荷物は、到着先の空港のターンテーブルから出てこない」を原則としてください。それでも預けなければならないのであれば、必ず重要度の低い物を入れてください。基本的には業務に影響のない、カジュアルな服、下着、水着、化粧品、シャンプー、リンス、せっけん、パジャマなどでしょうか。私はホテルの備品で間に合わせるので



写真はイメージです

、持っていきませんが。間違っても、仕事で使うPCやプレゼンテーション資料、出張先で訪ねる予定の相手先の住所を記載したメモなどを入れてはなりません。

トランジット(乗り換え)に失敗します

<トラブル事例>

搭乗していない乗客やトランジットの乗客のために、空港会社の社員が声を出して探し回り、到着ゲートまで迎えに来てくれるというサービスを実施しているのは、私が知る限り日本だけです。あれは「世界の奇跡」というべきサービスです。普通の航空会社は、トランジットの客がどうなろうと知ったことではありません。出発してしまった後の、誰もいない出発ゲートでぼうぜんとし、泣き出したところで誰も助けてくれません。

そうなった場合、ここからあなたは、自分の力だけで、

- 英語で事情を説明し、



- 英語で今後の対応の説明を受け、
- 英語で代替便を探し、
- 英語で電話のかけ方の説明書を読み、
- 英語で顧客とホテルに連絡をし、
- 英語で損金の交渉をし、
- 英語で再発券手続きを行う



写真はイメージです

ことになりましたが、本当にできますか、そんなこと。

<準備しておくこと>

あなたの取るべき戦略は1つです。トランジットが必要な航空便を使わないことです。現地直行の便を(どんなに値が張ろうとも)確保すべきなのです。会社の経理部門がゴネたら、あなたもゴネましょう。「私が、トランジットに失敗した時、経理部が私のサポートを責任を持ってやってくれるのですね」と言えば、まず勝てます。ここは闘う場面です。負けてはなりません。そうでないと、私のように、ドイツのフランクフルト空港で、人生で経験したことがないような長距離の全力疾走(スーツケース他、4つの荷物つき)をするハメになります。

タクシーの運転手は、自信たっぷりに、あなたをデタラメなホテルに連れていきます

<トラブル事例>

……思い出したら、ふつつつと怒りが湧いてきました。米国のサンノゼ空港から、私を50kmも離れたデタラメなホテルに連れていった、あのタクシードライバーのアホ野郎。こっちは地図まで見せたのに、「OK、この街のことなら任せとけ」と適当に走らせやがって……。

当然値引き交渉はしましたけどね。しかし、ヤツはこっちがネイティブでないことをいいことに、なんやかんや言い訳して、引き下がりませんでした。「文句があるなら、ここから歩くか？」という態度に、カチンとききました。

まあ、ここでトラブル起こされるよりは、100米ドル程度の損金で済ませてもらう方が私の会社の管理部門はありがたいはずだ、と考えて、適当な金額で折り合いをつけました。

<準備しておくこと>

もう、こうなると「運」ですね。アホなドライバーに当たらないことを祈るか、あるいは、公共交通機関(電車やバス)を使うことになります。

電車や地下鉄で、乗り換えに失敗します

<トラブル事例>

このサンノゼ事件以後、私はタクシーを利用せず、電車やバスを利用するようになったのですが、これもまたリスクが高いの



です。



写真はイメージです

——乗り換えにミスったら、もう、どこにも行けなくなるかもしれない。

まず、駅の表記の意味が分かりません。“ENTRANCE”は入口で、“EXIT”は出口です。では、“Sortie”、“Eingang”が何だか分かりますか？ 駅の中で、表記の意味が分からない恐怖はハンパではないですよ。どこに向かって歩き出せばよいのか全く分からなくて、プラットフォームでぼうぜんと立ちすくまなければなりません（われわれも、日本を訪れる旅行者の恐怖に思いをはせましょう）。

急行電車の中から、通過駅の駅名を読み取る（ドカベン山田クラスの）「動態視力」までも要求されます（本当）。一度、「なんかガラの悪いあんちゃんが、たくさん乗り込んでいるなあ」、という電車に乗って現地に向かったことがあるのですが、後でガイドブックを調べたら、「絶対に使うな」と言われている路線だったりして、青ざめてしまいました。

<準備しておくこと>

もし、鉄道/地下鉄を使うなら、そして乗り換えが必要な場合には、相当周到な「乗り換えイメージトレーニング」をしておく必要があります。私の場合、フライトの後半は、ほとんどその訓練だけで明け暮れています。飛行機の中で映画鑑賞などをしている時間は1秒もありません。

現地の間人は、善意でデタラメを教えます

<トラブル事例>

財布を紛失して運転免許証も失ったとき、米国ロサンゼルスにあるディズニーランドのセキュリティのおっさんの、「大丈夫、国内線なら身分証明書なしでも飛行機に乗れるよ」という言葉を信じて、ひどい目に遭いました。

航空会社のカウンターで、「搭乗できません」と言われて真っ青になった後、私は職場の同僚に助けを求めました。その時は、パスポートの写しを手に入れるため、米国に赴任していた私の日本人の同僚にオフィスの机の中をひっくり返してもらい、さらには、私のアパートにまで踏み込んでもらって、ファックスでコピーを送ってもらったのです。航空会社のスタッフは、ひどく同情してくれましたが、結局その日のフライトには間に合わず、翌日のフライトとなってしまいました。

<準備しておくこと>

権限のない人間の適当な言葉を信じてはなりません。最悪の状況を自分で想定して動くことです（この場合は、警察に行って盗難証明書と身分証明書の代わりとなる書類を発行してもらうことが正解でした）。

特に、米国人は人を喜ばせるのが大好きなので、このようなリップサービスをしますが、絶対

に信じてはなりません。彼らにとって、私たち外国人は「喜んで楽しんでもらうだけの対象」にすぎないのです。

現地で必ず病気になります

<トラブル事例>

海外出張の前は、普通、徹夜が何日も続くような資料作成などの事前準備が続いて、疲労しきっています。

加えて、

- 「肉プレス機」の隙間に十数時間挟まれ続け、
- 太陽が変な時間に出ている環境にさらされ、
- ヘドが出るほどしんどい体調で、
- しゃべれない言語を駆使してミーティングを実施し、
- 現地の人間だけが楽しんでいる歓迎会に「笑顔」で対応し続け、

さらに、

- 時差ボケで夜は眠れない、

という状況が加わるのです。

これほど完璧な拷問、そうそう経験できるものではありません。多分、農作業に使われている牛や馬だって、これほど働かされてはいないでしょう。「私は前世で、大量の人をあやめた罰を、今世で受けているのかもしれない」と本気で思えてきます。これで病気にならないヤツは、多分、「本気で仕事していない」のだと思います。

<準備しておくこと>

残念ですが、睡眠時間を可能な限り確保することくらいしか手がありません。

私の場合は、まずホテルの周りにあるコンビニを見つけて、ビールを大量(6本くらい)に購入します。時差ボケで夜中に目が覚めたら、間髪を入れずに一気に飲みます。2回、3回と目が覚めたら、ビールの本数が2本、3本と増えていくだけのことです。比較的危険性の低い精神安定剤をビールで流し込む、ということも、たまにやります(まねしないでくださいね)。



写真はイメージです

分かっています。こんなことをやりながら仕事をするヤツに、明るい老後があろうはずがありません。きっと、いつかどこかでひどい報いを受けるはずです。しかし、仕事というのは、「命を削って金を稼ぐ」といえる面があるのも、残念ですが事実なのです。

海外出張とは、「失敗が約束された地」への希望なき出発である

なんだか今回は、私のトラブルの話ばかりで、皆さん食傷気味かもしれませんね。

しかし、「海外出張とはこんなにも怖いものなのか」と思っていただけとしたら、それは私の本意です。

繰り返します。

海外においては、

- (1) 誰も信じてはならず、何も信じてはならない
- (2) どこにいようと、何をしてようと、必ずトラブルに遭遇する
- (3) 遭遇したトラブルを完璧にリカバー(回復)する手段はない

ことを、肝に命じておいてください。

「英語に愛されないエンジニア」にとって、海外出張とは「魅惑の世界」への希望に満ちた出発ではありません。「乳と蜜の流れる約束の地(旧約聖書)」どころか、未開の危険地帯、凶暴な野獣が生息するジャングル、無政府状態の銃撃地区であり、「失敗が約束された地」への希望なき出発である、と覚悟を決めてください。

このような場所でのトラブルを、人間らしい取り扱いを受け得るレベルのトラブルにとどめること——これが、「英語に愛されないエンジニア」に特化した「攻撃的かつ戦略的な海外出張準備」の目的です。

□

さて、海外出張において、入念な準備が大切だということは、十分にご理解いただけたかと思います。ですが、残念なことに、完璧には回避できないのがトラブルというもの。そこで、後編では、トラブルに遭遇した時の“初動方針”についてお話しします。

それでは、次回お会いしましょう。

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

